

今週の為替相場見通し(2025年6月2日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		142.11 ~ 146.29	144.03	141.00 ~ 147.00
ユーロ	(ドル)		1.1212 ~ 1.1418	1.1350	1.1200 ~ 1.6000
(1ユーロ=)	(円)		162.00 ~ 164.26	163.43	162.00 ~ 165.50
英ポンド	(ドル)		1.3417 ~ 1.3593	1.3453	1.3100 ~ 1.3600
(1英ポンド=)	(円)	*	192.50 ~ 196.32	193.91	188.00 ~ 198.00
豪ドル	(ドル)		0.6408 ~ 0.6537	0.6435	0.6400 ~ 0.6550
(1豪ドル=)	(円)	*	92.02 ~ 93.88	92.66	92.00 ~ 94.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

国際為替部 為替営業第一チーム 大野 梨紗

(1)今週の予想レンジ: 141.00 ~ 147.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

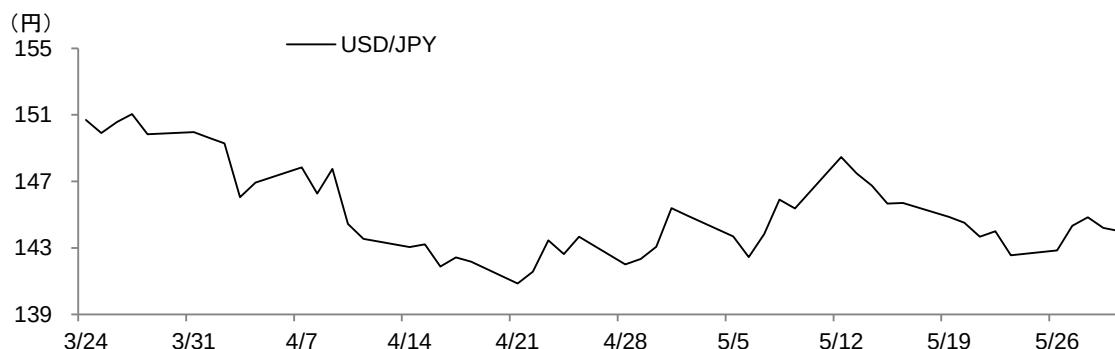
先週のドル/円は、上下する展開。週初26日、142.81円でオープンしたドル/円はトランプ米大統領による対EU関税発動延期の発表を受け、早朝に143円台まで小幅高も直ぐに142円台前半へ反落。海外時間は欧米休場により薄商いの中、142円台後半を中心にレンジ推移。27日、ドル/円は植田日銀総裁のタカ派発言を受け一時週安値となる142.11円まで下落。その後は、財務省による国債発行計画の見直しに関する報道を受けた円金利の大幅低下が材料視され、143円台半ばへ反発。海外時間は、米経済指標の強めな結果も相まって144円台半ばに続伸。28日、ドル/円は144円台前半を中心に上下動。海外時間には米金利上昇につれ一時145円台に乗せた。29日、ドル/円は米裁判所によるトランプ関税の一部差し止め命令を受け、一時週高値となる146.29円まで急騰。しかし海外時間にはドル買いが失速、一時144円を割り込んだ。30日、ドル/円は海外時間に控える4回目の日米通商交渉を前に143円台後半を中心に動意薄の展開。海外時間にはトランプ米大統領による米中通商交渉についての発言にリスクオフとなるも、その後の米金利上昇につれドル/円は144.03円で越週した。

今週のドル/円は上値の重い展開を予想する。先週5月28日、米国際貿易裁判所はトランプ政権の高関税政策について差し止めの判断を下したが、翌29日には米連邦巡回控訴裁判所によりその差し止めの判断は一時停止とされ、関税措置は復活した。関税を巡るこのような判決は、日本など関税交渉中の国々が早期の関税合意に踏み切れなくなる可能性も考えられ、市場でのリスクオンのドル買い円売りを抑制する一因になると言えよう。さらに30日には米国へ輸入される鉄鋼・アルミニウムについて一律25%から50%の関税引き上げが表明された。トランプ米大統領による関税の流動的なアクションプランに振られる中、前述したトランプ政権側の控訴手続きが今週中にも進められる見込みであることから、市場の様子見姿勢は強まりやすいものとみる。今週は6月2日(月)に米5月ISM製造業景気指数、4日(水)には米5月ISM非製造業景気指数、6日(金)に米5月雇用統計の重要指標発表を控える。鉄鋼・アルミニウムの追加関税が4日(水)から予定通り発動され、経済指標結果が米国のインフレ下での景気後退が示される内容となった場合にはドル売り優勢となりやすく、今週も相場の急変動に警戒したい。

(3)先週までの相場の推移

先週(5/26~5/30)の値動き:

安値 142.11 円 高値 146.29 円 終値 144.03 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

国際為替部 為替営業第二チーム 伊藤 基

(1) 今週の予想レンジ: 1.1200 ~ 1.6000 162.00 ~ 165.50 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は、週半ばにかけては大きく下落したものの、その後は値を戻す展開となった。週初は、トランプ米大統領が欧州に対する追加関税の適用を延期するとの考えを示すと、ユーロ買いが優勢な展開となり、1.1410台まで上昇する場面が見られた。欧米の連休明けに当たる5月27日では、米5月消費者信頼感指数が前月に比べて大きく改善する結果。これを受けて、ドル買いの流れが強まりユーロ相場は次第に売り優勢な流れ。翌28日は、欧米ともに目立った材料はなかったものの、米金利の上昇などもあり軟調な推移。こうした中で29日には米国際貿易裁判所によるトランプ関税の一部差し止め命令を受けて、一時1.1210台まで下落する場面が見られた。一方で、米国時間に入ると、米1~3月期実質GDP成長率や米新規失業保険申請件数などが軟調な結果になったことを受け、ユーロが買い戻され1.13台後半まで値を戻す。30日はトランプ大統領がSNSで「中国は米国との合意に違反した」と投稿したことを受けてドル売りが強まる場面も見られたものの、総じて見れば方向感に乏しい値動きとなり、1.1350で週末を迎えた。

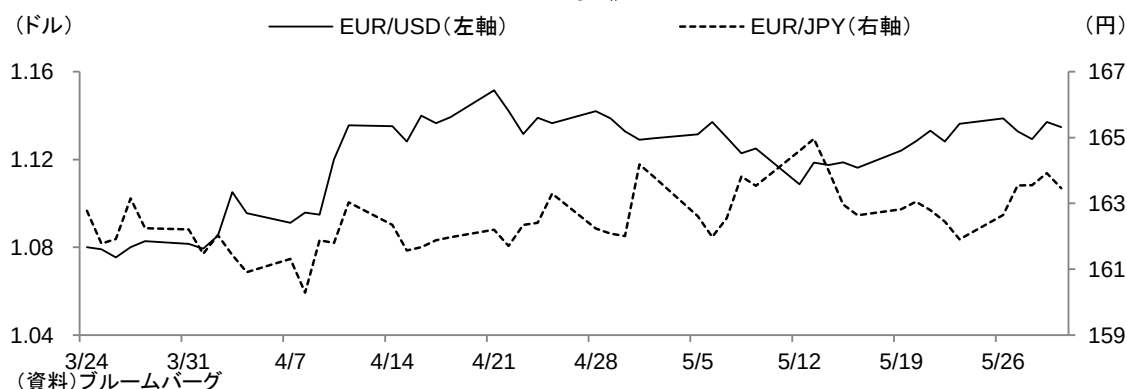
今週のユーロ/ドル相場は、堅調な推移を予想。米国の関税政策については引き続き先行き不透明感が強い状況であり、簡単にはドル売りの流れを変えることは難しい。先週末にはトランプ大統領が中国に対する不満を表明したことからも継続中の関税交渉がすんなりと進んでいく可能性は低そう。ただ、こうしたヘッドラインが流れるたびに市場はドル売りで反応せざるを得ない。また、今週は6月5日(木)にECB政策理事会が控えており、市場では0.25%ポイントの利下げが織り込まれている。欧州のインフレ率は順調に低下しているなかで、景気は底堅く推移しておりECBが利下げを急ぐ理由は以前に比べると少ない。こうした状況下では、ECB政策理事会の声明文及び理事会後のラガルドECB総裁の記者会見ではタカ派よりのコミュニケーションが出てくる可能性が高いと見ている。トランプ関税を巡る不透明感からドル安地合いが続く中で、ECBからのタカ派コミュニケーションが出れば、ユーロ/ドル相場は上値を試す展開になるであろう。ECB政策理事会以外の主な予定としては、6月3日(火)ユーロ圏5月CPI、4日(水)ユーロ圏5月サービス業PMI、6日(金)ユーロ圏1~3月期実質GDP成長率、4月小売売上高などの公表が控えている。結果次第では為替相場にも大きな影響を与える可能性があるだけに、注意を要する。

(3) 先週までの相場の推移

先週(5/26~5/30)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1212 高値 1.1418 終値 1.1350

(対円) 安値 162.00 高値 164.26 終値 163.43



3. 英ポンド

欧州資金部 神田史彦

(1) 今週の予想レンジ: 1.3100 ~ 1.3600 188.00 ~ 198.00 円

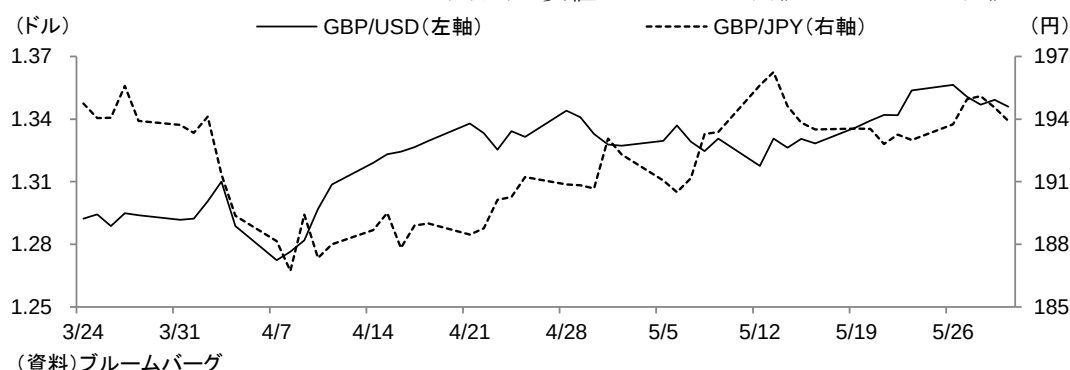
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間の英ポンド相場は前週の上昇から一転して調整となった。祝日を経て3連休明けの5月27日、対EU米関税延期報道によってリスクオンとなりドル高で英ポンドは売られる。翌28日は特段の材料がない中、前日の流れを次いで英ポンドは引き続き対ドルで弱含んだ。29日は海外時間に米国国際貿易裁判所による米関税差し止め報道が出た影響でドル高でのオープンとなる。しかし欧州時間では根強いドル資産回避の動きか、もしくは米関税執行の法的根拠が他にも多数ある見方が広まったか、次第にドル売りに傾いていき英ポンドも直近上抜けたレンジ上値抵抗線レベルで反発した。30日は米中関税についてトランプ米大統領による「中国が合意を破っている」という発言で上下したもののおおむねオープンと同水準で週末に渡った。

今週の英ポンドはヘッドラインによる突発的な動きに左右されるものの基本的には上値重い展開を想定する。英国関連では経済指標を含め、市場を動かすような材料が特段見当たらない。昨今市場の流れを支配している米関税周りのヘッドライン次第で、内容によってドル資産売りとなるか、巻き戻しとなるか、全体的な市場の流れに追随するように思う。しいて挙げれば、6月5日(木)にECBによる政策金利発表が予定されており、スワップ市場では▲25bpの利下げがほぼ織り込まれている。BOEは既に先月の会合でタカ的なスタンスを見せており、市場は6月の利下げ織り込みを後退させる形で素早く反応した。その意味でECBにおいてタカ派的なサプライズが出たとしても極端に大きな影響はないように思う。反対にハト派に大きく傾いたとしても直近の英CPIが強含んだこともあり、次のデータを待たずして大きく動く展開は考えづらい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(5/26~5/30)の値動き: (対ドル) 安値 1.3417 高値 1.3593 終値 1.3453
(対円) 安値 192.50 高値 196.32 終値 193.91



4. 豪ドル

国際為替部 為替営業第一チーム 尾身 友花

(1) 今週の予想レンジ: 0.6400 ~ 0.6550 92.00 ~ 94.00 円

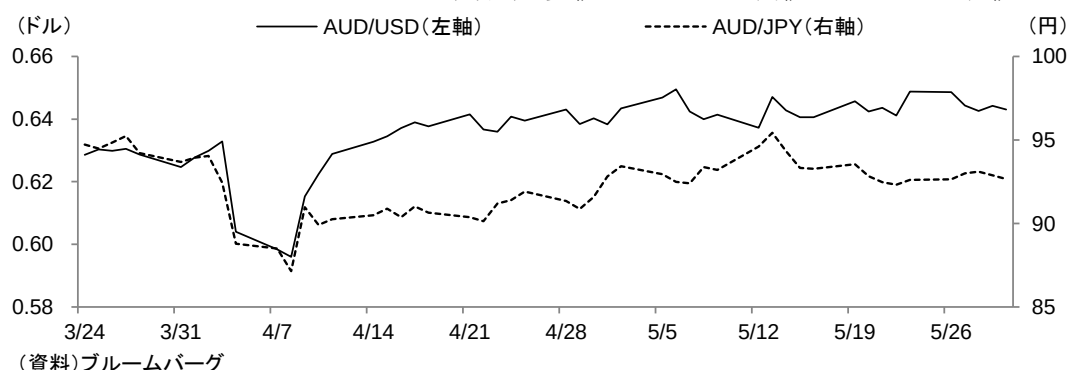
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは週初上昇するもその後は反落した。週初26日、シドニー朝方にトランプ米大統領が対EU50%関税の延期を合意したとのヘッドラインを受けて、円は対ドルで売られる一方、豪ドルやユーロは対ドルで買われ、一時週高値となる0.6537まで上昇するも、息切れて反落。NY、ロンドン市場が休場で薄商いの中、じりじりと売り進まれ0.6490まで下落して引けた。27日の豪ドルは売りが先行。序盤に0.65手前まで上昇する局面もあったが、ドル買い戻しの流れを背景に下落幅を拡大する展開となった。日本の財務省による国際発行計画の見直しに関する報道を受けた円金利の急低下が材料視され、円が大幅下落する中、ドル高が進行。NY時間に発表された米5月コンファレンスボード消費者信頼感指数が予想を上回り、ドルはNY引けにかけて更に上げ幅を伸ばす展開に。この流れから豪ドルは下値追いの展開となり一時0.6435まで下落後、0.6440近辺まで小幅に戻して引けた。28日の豪ドルは0.6445近辺で取引開始後、豪4月CPIは前年比+2.4%と前月から横ばいだったものの、市場予想の+2.3%を上回る結果となった。豪4月CPIトリム平均値は+2.8%上昇し、こちらも前月からやや加速したが、豪ドルの反応は限定的であった。その後、RBNZ理事会が▲25bp利下げを発表したことでニュージーランド・ドルが売りで反応すると豪ドルも連れ安に。米金利上昇や月末の資金フロー等を背景に、ドル高が進行する中、豪ドルはNY引けにかけて更に下落幅を拡大し、一時0.6410まで下落した。29日は、シドニー時間朝方、トランプ米大統領の世界各国に対する相互関税に対し米国際貿易裁判所が違法判断を下したとの報道を受けてドルが買い進まれる中、豪ドルは売りが優勢な展開に。ただし、円やユーロが対ドルで大幅に下落する一方、豪ドルは底堅く、一時週安値となる0.6408まで下落した後は上昇に転じた。この日発表された米経済指標が不調な結果となり、米経済の先行き不透明感が意識される結果となったことで米国債利回りは低下し、ドル安が進行。豪ドルは0.6445近辺まで買い戻されて引けた。週末30日の豪ドルはもみ合い。豪4月小売売上高が予想比・前回比低下し、一時豪ドルは0.6420近辺まで下落。一服後は0.64台前半にて底堅い推移となるも、海外時間序盤にかけて徐々に下落し、一時週安値レベルをつける場面も見られた。その後、調整的なドル売りの影響を受けて再び0.64台後半近辺まで回復するも終盤にかけては0.64台前半にて小緩んでクローズした。

今週の豪ドルはやや底堅い展開を予想する。先週発表された豪4月CPIは前月比横ばいの結果となったものの市場予想を上回る結果となり7月の利下げ織り込みが低下。また、ドル高が進行する場面でも他の通貨対比豪ドル安の進行は鈍く、現行レベルでの底堅い値動きが継続するのではないかと考えている。対円ではドル高の局面で豪ドル高が進行しており、ドル買いが強い局面での豪ドル/円の上昇を予想する。ただし、引き続きトランプ関税に関するヘッドラインを受けた値幅を伴った値動きには注意が必要。今週は、6月2日(月)豪5月製造業PMI確報値、3日(火)豪RBA議事要旨、4日(水)豪1～3月期GDPの発表が予定されている。市場はまちまちの結果を予想しているが、弱い結果となれば一時的に豪ドルが弱含む局面も見られるか警戒したい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(5/26～5/30)の値動き: (対ドル) 安値 0.6408 高値 0.6537 終値 0.6435
(対円) 安値 92.02 高値 93.88 終値 92.66



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。